



スワジク姫物語

The Swazik futuer...

トマトサンド

スワジツ姫

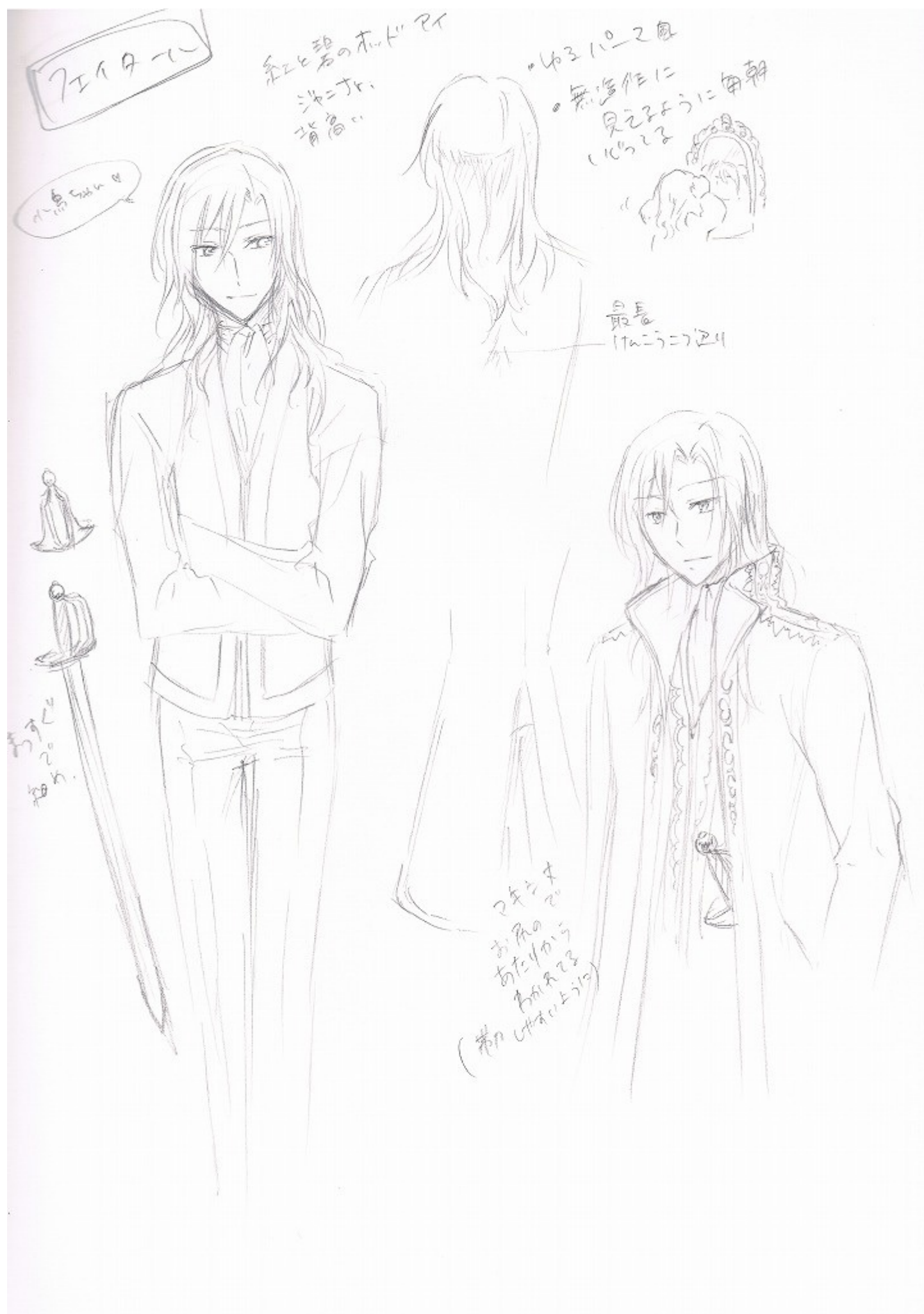
「ホウ」が入った後です。
「ホウ」が入ったことにより、
はいのつだけ男の子の
肩いまいかかると。
少年1.5:少女8.5
くらい...?

若干パルシン
だけど
完全にパルシン
ではない
。一層ずう
れいめのかあります

幼児体型
家

実際は
もう少し
幼く感じ
かた

おしれ ver.とか



ホーエン

栗色
無造作
リバーカス

くっ
億年 15才前後

まゆため
気持ちはいい



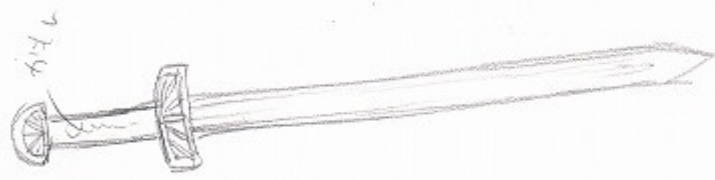
トゲサの120

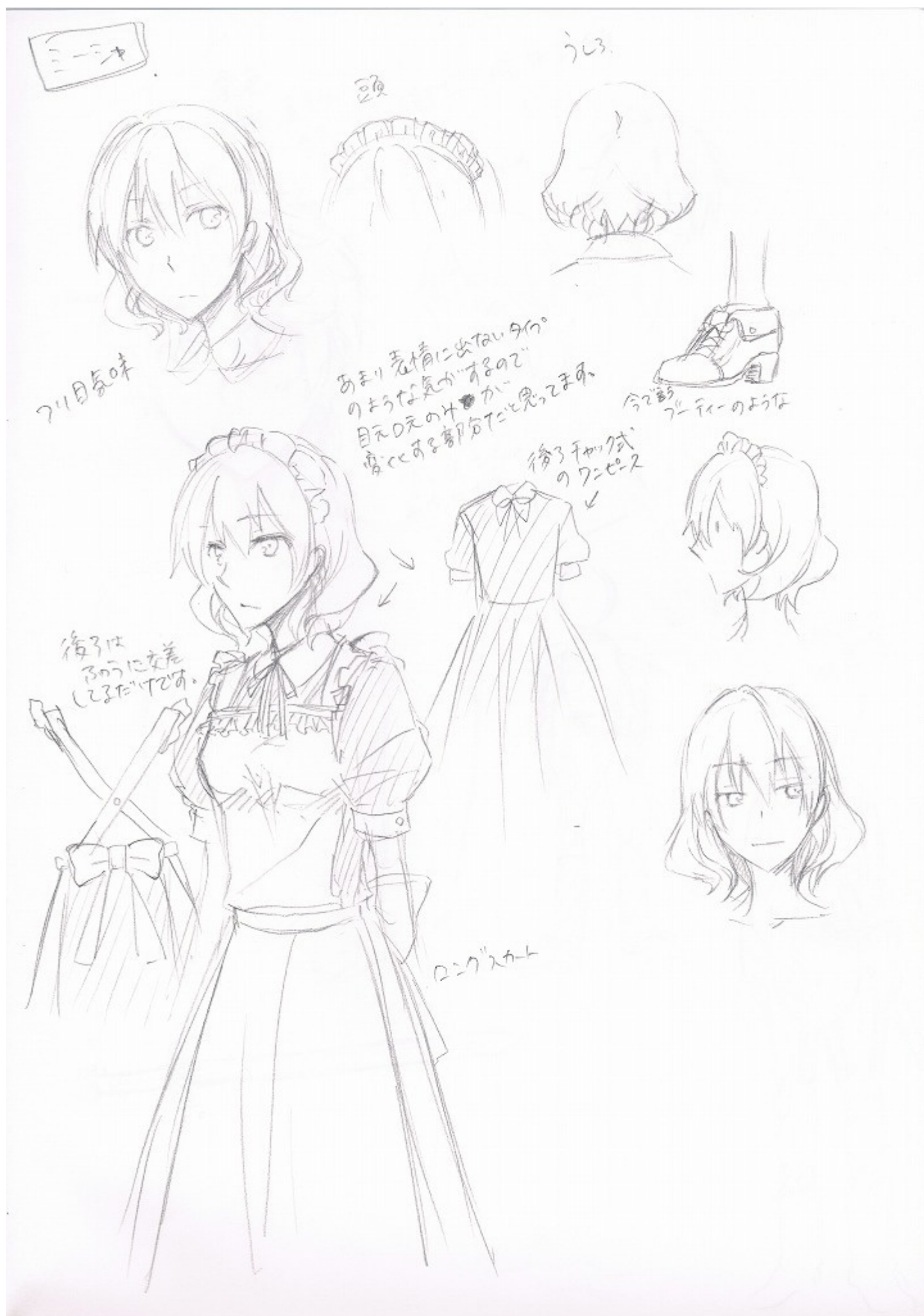
15才12才ほど
一応矢士なのは
筋肉はある
細身



※資料見直し

ホーエン
15才前後
12才前後





真っ暗な闇の中、ふわふわと漂う自分の意識。

まるで光の届かない深海にいるようだ。

何も感じる事が出来ず、何にも聞こえない。

手や足を動かしてみるけど何にも手ごたえが無く、むしろ手足があるのかさえ疑わしかった。

声を出そうとしても、もちろん出ているかどうか分からない。

なのに自分がここに在るのだけは、しっかりと自覚できた。

いったいどれくらい闇の中を漂っていたらう？

闇の中に何か違和感を覚えたので周囲を探してみると、うっすらとした細い線の様な光と、そこから零れ落ちてくる微かな音に気がついた。

なんだろう？

そう思って光へと近づこうと僕は手と足を必死に動かした。

もちろん何の感触も実感も感じないけれども。

それが功を奏したのか、じわりじわりと意識が光に向かって近づいてゆく。

少しずつ大きくなる胸の鼓動。

だけでも光に近づくにしたがって、自分の体が冷たくなっていくのが分かる。

あと息苦しい。

聞こえていた音もだんだんと騒音に近いレベルになってきて、正直頭の中でぐわんぐわんと木霊している。

うえ、吐きそう。

さらに意識が浮上する。

僕は、さっきから聞こえていた音が誰かの叫び声だという事にようやく気がついた。

「早くタオルと着替えをもってこい！ 濡れたままじゃ体温が下がる一方だ」

「まだ息は吹き返さないのか？ 大分時間が経っているんだぞ！！」

「うるさい！ 俺だって一生懸命やってるんだ！ それよりも早く医者連れてきやがれ！！」

複数人の野太い声が聞こえる。

誰か倒れたのかな？ それとも溺れた？

大変なのは分かるけど、正直うるさい。

ああ、頭がガンガンする。

「くそっ、もう一回息を吹き込むぞ！」

声がしたかと思うと、僕の唇に生暖かい何かが押し付けられた。

一気に送り込まれる大量の空気。

肺が無理やり押し広げられたかと思った瞬間、胸の奥から生暖かいものが逆流して喉を蹂躪

する。

「うぼうえ」

胸につっかえていた何かを吐き出したら、凄い咽てしまった。

涙も鼻水も止まらない。

廻りの声がいっそうやかましくなったが、そんな事に構ってられるほどの余裕などなかった。

激しく繰り返す嘔吐と咳に横隔膜が痙攣を起こしかけ、死ぬほどの苦しみにのた打ち回った挙句、僕はあっさり意識を手放した。

どれ位闇の中を彷徨っただろうか。

再び僕の意識は闇の底から浮かび上がる。

今度は死ぬような苦しみとはまったく無縁の、穏やかな目覚めだった。

しばらく焦点の合わない画像に苦勞したけど、大人しく待っていればすぐにピントが合ってきた。

「ここ、何処だろう？」

ぼんやりとした頭で、なんとか自分の現状を把握してみる。

まず、凄く手の込んだ天井、綺麗なシャンデリアと蝋燭、そして割と離れたところにある大きな窓。

壁は真っ白でしみ一つ無いし、壁から突き出ているアンティークな燭台は高価そうだ。

ふかふかとした枕に、糊の効いたシーツ。

一流ホテルのベッドに寝かされている気分だ。

まだ少し頭がクラクラしているけれど、それでも最初の目覚めよりずっと気分がいい。

「喉、渴いたな……」

ぼそりと呟いた独り言に違和感を覚える。

あれ？ 僕の声ってこんなに高かったっけ？

そう思って頭を掻こうとすると、挙げた手に絡みつくサラサラな何か。

「うわっ、すっげー綺麗な髪だなあ。銀色の髪なんて生まれて初めてみたよ」

もともと僕の声は女の子の様だとよく友達にからかわれたことがあったけど、いま聞こえた声は女の子そのものだった。

そっと喉を押さえながら声帯を震わせてみる。

「あー、あー。うーん、やっぱり僕が喋っているってことで間違いないのか」

とりあえず声の問題は後回しだ。

それよりも目の前でゆらゆらとゆれる銀の髪の方が気になる。

腰まであるまっすぐな髪を一房掬い取り、目の前まで持ってきてマジマジと観察する。

触り心地がとてもスベスベしていながら軟らかく、キューティクルが窓から入ってくる陽光をキラキラと反射していた。

それに凄く良い匂いがして、なんというか急に恥ずかしくなった。

で、さらにびっくりしたのが髪を珍しそうにいじっている僕の手だ。

正に白魚の様なほっそりと繊細そうな指に桜色の綺麗に整えられた爪。

少なくとも自分の指はこんなに綺麗な手ではないという事だけは確かである。

そして極めつけは、胸部に感じる今までに無い重み。

大きく動くたびにぶるんと震えるその物体は、一見冷静そうに見える僕の精神をガリガリと削ってくれる。

それはもう情け容赦なく。

確認するまでも無く僕の男としての大事なものが無くなっているのも感じとれたし、何か異常な状況に陥っているということは理解できた。

この状況に当てはまる言葉がひとつ、僕の頭の中に浮かび上がる。

「……女の子になっちゃったのかよ、勘弁してくれえ」

小説や漫画でお馴染みの性転換ってやつ。

いったい何をどうしてこうなったのか。

僕は頭を抱えてベッドに蹲るが、そこからもいわゆる女の子の匂いが追い討ちのように僕の鼻腔をくすぐった。

うん、なんか女の子の部屋に初めて入った時の事を思い出す。

ぼっと熱くなる両頬に戸惑いながらも、ひとしきりベッドの上で身悶えた。

と、部屋のドアが控えめにノックされるのが、ピンク色に染まった僕の脳に届く。

それはそうか。

誰かが僕をここに連れてきたのなら、当然その誰かが接触を持ってくる事だって考えられえるのだから。

ベッドの上で蹲りながら、じっと扉を見る。

誰が入ってきてもいいように警戒しながら見続けるが、一向に誰も入ってこようとしない。

しばらくするともう一度、同じようなリズムでノックが繰り返された。

「えっと、どうぞ？」

恐る恐る声をだす。

するとほとんど音もさせず、高さが3 mはありそうな扉がゆっくりと開かれた。

その扉の向こうに立っていたのは、こういったお話には付き物の『メイド』さんだった。

「失礼いたします、姫様」

エプロンドレスと呼ばれる服を身に纏ったくすんだブロンドの女性（たぶん18、9歳位だろうか）は、丁寧にお辞儀をするとゆっくりと僕に近づいてきて顔を覗き込んできた。

綺麗なエメラルドグリーンの瞳がとても美しく、化粧をせずともシャープな顔立ちのメイドさんに僕は頬を赤らめたまま息を呑む。

アゴ辺りで綺麗に切りそろえられた髪は、彼女の凛とした表情に凄く似合っている。

彼女に見とれていると、メイドさんの綺麗な手が僕の頬にそっと添えられる。

その指が頬を伝って顎の下にくると、つつと少し強引に上を向かされた。

キスをしますと突然言われても、ハイとしか答えられない空気と体勢に僕の心臓はバクバクである。

思わずきゅっと目を瞑る。

これが僕のファーストキスなのかと思うと、頭の中が混乱してきゅっとシーツを握り締めるしか出来なかった。

ふっと目の前のメイドさんの存在が遠のく。

肩透かしを食らったような感覚に、僕は意識せずに声を零す。

「あっ……」

「？　なんでしょうか、姫様」

「い、いえ、何でもありません」

「そうですか。大分お加減も良くなられたご様子ですが、念のためお医者様をお呼び致します。しばらくそのままでお待ちくださいませ」

慌てる僕を尻目に颯爽と身を翻したメイドさんだけれども、背を向ける一瞬、彼女の頬が赤く火照り瞳が潤んでいたように見えた。

まさか彼女も期待してたのかなと馬鹿なことを思いつつ、とりあえずは状況も分からないのでお医者さんが来るのを待った。

あるいは元の僕の姿に戻れるヒントなり解決方法を知っているかもしれないし。

……ありえないか。

さほど待たされずに扉が再びノックされた。

「は、はい、どうぞ」

「失礼いたします、姫様。ドクター、グェロをお連れいたしました」

「おはようございます、スワジク様」

恭しく頭を垂れるのは、漫画で見るような中世の貴族が身に纏うような衣装だ。

ただ残念なことに中世貴族の衣装は衣装でも、かぼちゃズボンにボンボリのような肩周り、タートルネックの様な詰襟である。

白を基調とし所々に青のアクセントがはいっているんだけど、そのアクセントのつけ方がさらに悪目立ちしている。

一昔前のコメディアンが白鳥の頭を股間につけてコントに出てきそうな格好だ、と言えは分かっていただけのだろうか。

そして頭にちょこんと乗った帽子。

あからさまにサイズが違うだろうと言いたい。

で、そんな可哀想な格好をしているのが、割とお年を召したご老人である。

笑ってはいけないと思いつつ、ぐっと下腹に力を入れて笑いを堪えた。

そんな私に気付く様子も無く、2人は手際よくベッドサイドに色々な道具を揃える。

「さて、スワジク様。お加減はどうでしょうか」

「えっと、別に大丈夫だと思います。時々脇がちくっと痛む位でしょうか」

「なるほど。眩暈、吐き気は？」

「起き掛けに少し眩暈があったくらいで、その後は別に大丈夫です」

「分かりました。ではお召し物をお脱ぎください」

「あ、はい」

言われるままに浴衣のような絹の上衣を肌蹴させた。

服の下に隠されていた真っ白な肌。

大きくも無く小さくも無い形の良い胸部（胸部ったら胸部だ）。

さらにその下、下腹部が胸の間から見える。

ああ髪が銀色だからかあ、などと馬鹿な事が頭をよぎる。

そのすべてが初心な僕には刺激的過ぎて、鼻の奥がなにやら熱くなってしまう。

「っ！」

後ろで控えていた金髪メイドさんが、僕の顔を見て声にならない悲鳴を上げる。

なんか変なことをしただろうか？

などと考えていると、おじいさんが台の上にあった白い布を手渡してきた。

「それでしばらく鼻を押さえてください」

「はえ？」

そう言われて、初めて自分が鼻血を垂らしていたことに気がつく。
どんだけ童貞野郎なんだよ、僕は。

昨日、私が傍仕えをしている姫が城壁より転落して湖に落ち、溺れたそう。
本当に私が非番のときでよかったと心の底から安堵する。
あの姫のことだ、目を覚ましたらそれこそ侍女の3人や4人は首を切られるだろう。
物理的な意味で。

そんな命の心配もあって主だった侍女達は泣き崩れるばかりでまったく役に立たず、とりあえず責任追及されないであろう私が矢面に立たされた。

「まったく、とばっちりで私の首が飛んだらどう責任を取ってくれるのかしら」

ぶつぶつと同僚たちへの文句を小声で言いながら、私は北の塔舎の中を歩く。
ここはあの蛮行姫が領主様に強請って立てた小宮殿。

帝都にあるヴェルエルエ宮殿を模した造りになっていて、外装も内装もこれでもかというくらい華美に装飾されている。

私の実家の年貢租銭がこんなものに費やされているのかと思うと、正直唾を吐きかけたいという衝動に駆られる。

まあそんな衝動にも、もう慣れたのだけれど。

スワジク様の寝室が見えてくると、丁度扉の前に目を真っ赤にした同僚が立っていた。

彼女の名はアニス。

昨日姫様についていた侍女の一人であり、私の親友だ。

私が近づくと、くすんと鼻を鳴らしながら眼鏡を押し上げて目尻の涙なんか拭いたりする。

うん、なんか凄く小動物っぽくって守ってあげたい。

思わず彼女の短い赤毛をくしゃくしゃと弄ってしまう。

「ごめんね、ミーシャちゃん。私、もっとしっかりしなきゃって思うんだけど……」

「いいのよ、アニス。あの姫の扱いには慣れてるし大丈夫だとは思う。で、今はまだ起きてない？」

「ううん、さっき起きたみたい。なんかごそごそと音がしてたし」

「……で、何してんの？」

「待ってた、ミーシャちゃんが来るの」

恐る恐るといった風に私を上目遣いでみるアニス。

思わず砂糖を吐いてしまうほどの破壊力だが、目の前にある危機のために今いち萌えきれない

。

目が覚めてすぐに朝の支度を始めないと、あの姫は暴れるのだ。

これはコブや痣の一つも覚悟しないといけないか。

深いため息をついて私はアニスを横へ押しやり、静かにドアをノックし蜜行姫の言葉を待つ。

だがさっきまでごそごと動いていた気配がなくなり、部屋の中がしんと静まりかえる。

怒声を覚悟していただけに、少し拍子抜けである。

しばらく待っても状況に変化が見られない。

仕方が無いのでもう一度ノックをする。

「えっと、どうぞ？」

私は自分の耳を疑った。

ノックの返事は罵声ではなく、何かに脅えるような可憐な少女の声なのだ。

これはまったくの想定外。

がしかし、ここで泡を食って姫の不興を買うわけには行かない。

ここで取り乱そうものなら、それこそ24時間調教フルコースが待っている。

まあ、殺されないだけマシだろうけども。

気を取り直して、私はそっとドアノブを回して扉を押し開く。

「失礼いたします、姫様」

丁寧にお辞儀をしてから部屋へと1歩進む。

目の前にあるのは真っ白な白亜の部屋に鎮座するキングサイズのベッド。

そのベッドの上に、姫が蹲りながら、こっちをじっと凝視していた。

なんというか、花の蜜に誘われる蜂の様な気分で目の前の少女に引き寄せられる。

なんだろうこの姫、こんなに可愛かったっけ？

そんな馬鹿なことを考えていたからだろうか、私の悪い癖が出てしまった。

まるでジゴロのように少女を見つめ、頬を優しく撫でながら顎をついっと持ち上げる。

その間、私の瞳は目の前の少女に釘付けだ。

ふるふると揺れる睫毛の重さに耐えかねたのか、ゆっくりと少女の臉が下ろされる。

頬はうっすらと桃色に色付き、軽く開かれた瑞々しい唇からは甘い吐息が吐き出された。

何これ、喰っちゃっていいわけ？

そんな駄目思考に陥っていた私を、親友のアニスが扉の向こうから必死に声を掛けて制止してくれた。

「ミーシャちゃん、正気に戻って！ それ色んな意味で駄目だって！！」

その声に正気を取り戻した私は、今更ながら自分が仕出かそうとした事に恐怖を覚えた。

この私が蜜行姫に心を奪われるなんて、ありえない！

すっと背筋を正して、姫から1歩距離を置く。

目を閉じたままじっとしていた姫を見下ろすと、きゅっとシーツを掴んで震えている手が見えた。

くっ、どんだけ可愛いのか。

蜜行姫だからって侮っていたわ。

そうよね、黙っていればこの姫は超美少女なのだ。

だが、ここで本能に流されたら試合終了だ、私の人生的に。

また吹き飛びそうになる理性をкаろうじて繋ぎ止めながら、深く深呼吸をする。

目の前の少女の口から漏れる微かな失望の声にも、もうたじろがない。

「あっ……」

「？　なんでしょうか、姫様」

「い、いえ、何でもありません」

どこか残念そうな顔をしてこちらを見る姫。

何の罠なのだ。

侍女をからかうもしくは陥れる新しい方法でも開発したのか、この姫は。

一時は危うかったが、もう騙されません。

「そうですか。大分お加減も良くなられたご様子ですが、念のためお医者様をお呼び致します。しばらくそのままでお待ちくださいませ」

そうやって私は上気した顔を隠す意味でも、すばやく姫に背を向けてこの部屋を後にした。

廊下に出ると、ぷうと頬を膨らませたアニスが待っていた。

「ミーシャちゃん、浮気はイヤです。ううん、浮気はもうミーシャちゃんだから仕方ないと諦めたけど、あの人とだけは絶対にイヤ」

「あ、あはは。馬鹿だなあ、アニスは。姫がなんか新しい嫌がらせの方法を開発したみたいだから、ちょっと試してただけじゃまいか」

「何言ってるのですか。ミーシャちゃん、頬が赤いです」

「いやいやいや、これはなんというか恐怖に耐えた結果といいますか」

「うそばかり」

拗ねる親友の機嫌を取りながら、私はドクター・グエロの控え室へと向かったのだった。

僕は窓の外を見ながら、今日何度目かの深いため息をついた。

結局あの後、なんだかんだでドクターにいろんな事を聞きそびれてしまったし、自分の置かれている現状を把握しようにもメイドさんが外に出してくれない。

唯一僕に出来ることは、こうやって軟禁されている部屋の窓から外の風景を眺めるだけ。

とは言いつつも、これはこれで馬鹿にならなかった。

今いる部屋がどうやら結構高い位置にあるようで、この建物の周りや外壁らしきもの、さらにその向こうの町並みまで良く見える。

建物だけではなく、そこで生活しているであろう人々の姿も。

「これってやっぱり日本じゃないな。うん、TSで異世界か過去へのトリップ、もしくは憑依ものか」

得られた風景や人の服装、行きかう馬車などから、この世界の文明レベルがおおよそ中世くらいだろうと予想する。

そして姫様と呼ばれ傳かれる外の人。

「これで軍事知識や内政知識が豊富にあれば、物語の主人公みたく活躍出来たのかな？」

まあ一般的な学生でしかなかった僕が、そんな夢みても仕方ないんだけど。

元に戻れないとしても、なるべく平穩に暮らしていけたらいいなあ。

それに地位や権力があっても、どう振舞ったら良いかわかんないしねえ。

「とにかく！ 外の人と中の僕が違うってことを悟られてはいけないという事だね。それにはまず外の人がどんな人物だったのかってことを知らなきゃ話にならないか」

既に侍女たちには訝しがられているようだけれども、まだ大丈夫なはず。

会話は当たり障りの無い事しか言わなかったし、なるべく迷惑をかけないように大人しくしていたし。

とにかくお姫様なんだから、丁寧に、お淑やかにを基本にしていれば間違いはない！

……はず。

そうやって外の風景をぼんやり眺めていたら、扉をノックする音が聞こえる。

はいと返事をしながら振り返ると、そこには既に扉を背に佇む2人の男性がいた。

「お目覚めかな、リトルプリンセス」

銀色の髪、紅と碧のオッドアイ、すらりとした鼻筋にきりりとした口元、目元は涼やかで背も高く、ジャニーズJrに居そうなイケメンだ。

しばらくぼかーんとしていたら、銀髪イケメンの後ろに立っていた黒髪イケメンが不機嫌そうに呟く。

「私は止めたほうが良いと忠告はいたしたのですが、申し訳ございませんでした」

「何を言う。貴様だってほいほい付いてきたではないか、レオ」

「付いていかねば、貴方は何処までも暴走するからです。妹君とはいえ、仮にもレディの部屋に無断で入るなど貴方には良心というものがないのですか？」

「そのおかげでいいものが見れたではないか」

「あのお、いいものって何が見れたのでしょうか？」

二人が僕をそっちのけでヒートアップしていきそうだったので、とりあえず会話に参加してみた。

っていうかこの部屋割と殺風景だし見て楽しそうなものって何もないはず。

レオって呼ばれた黒髪のイケメンは、口をつぐんでむっつりと黙り込む。

その代わりに銀髪イケメンが、すごく優しげな笑みを浮かべて僕の傍へと近づいてきた。

「分からないかな、私の可愛い小鳥ちゃん」

「えゝ？ い、いえ私にはさっぱり」

小鳥ちゃんってどんだけサバイ科白を垂れ流すのか、この銀髪イケメンは。

見ろ、鳥肌が立ってしまったではないか。

そういえばレオが僕を妹君と言ったから、このイケメンは兄貴になるんか。

兄妹ならこんなやり取りも有り……か？

などとクダクダ思考を横においておき、多少引き攣った微笑みながらも首を左右に振って答えて見せる。

銀髪イケメンはさりげなく僕の肩を抱きしめると、優しく僕の髪に口づけをした。

（えゝ えゝ えゝ えゝ？ それって兄妹で有りなのか？）

混乱する僕を何か面白そうな珍獣でも見るように観察されていたのだが、割とテンパっていたのでまるで気付けない。

「窓辺で黄昏れる美少女。これほど絵になるものはないとは思わないか？」

「ちょ、お兄様、耳元で囁かないでください。くすぐったすぎます」

こいつ絶対女泣かせだ、リア充にちがいない。

男だったころの僕であっても、こんなさりげなく女の子の肩なんか抱けなかったし、ましてや私の小鳥ちゃんだの黄昏れる美少女だのといった科白なんか素面で吐けるかっ！

多少の場違いな怒りを籠めて、リア充イケメン（銀髪イケメンからクラスチェンジ）の胸をやんわりと押し返す。

本当はキモイから突き飛ばしても良かったのだけど、お姫様らしくないからね。

けど意外にも押されるままに後ろに退がるリア充イケメン。

もうちょっと抵抗されるかと思ったのに。

「そんな顔をしないでくれよ、私だって義理とはいえ可愛い妹に嫌われたくは無いからね」

「はあ、そうですか」

「それに今日はとても面白いものを見れたしね。そうは思わないか、レオ」

「貴方の悪ふざけには付いていけません、まあ同感とだけ言っておきましょうか」

「はあ……」

リア充イケメンはそのまま僕に背中を見せるとスタスタと扉へと向かってゆく。

「まあ、とりあえずお見舞いに来ただけだから今日はこれで失礼するよ」

「あ、はい。わざわざ有難うございました」

「……有難うございました、か」

「え？ ボク何か変なこといいました？」

「いやいや、綺麗なレディに感謝されるとドキドキするなと思っただけさ」

（駄目だこいつ、早くなんとかしないと……）

レオが扉を先に開け、リア充イケメンがさも当然といったふうに扉をくぐる。

そこでぴたりと足を止め、僕に振り返って手を振って見せた。

「それじゃあね、スワジク。とりあえずは当面は大人しくしておいで。近いうちにまた来るから」

「あ、はい。分かりました」

「うん、いい返事だ。それじゃあね、蜜行姫」

無駄にいい笑顔を振りまくっていたリア充イケメンも、扉が閉まると見えなくなる。

ようやくほっと一息つけた。

そんなに長い時間ではなかったけれども、やはり外の人との親類縁者や知人なんかが訪ねてこれると気を使う。

こんな対応で本当によかったのだろうかと思うものの、圧倒的に情報が足りないのだから仕方が無い。

今はやれることをやるだけだ。

「でもバンコウ姫ってどういう意味なんだろう？」

フェイ兄が出て行ってからはやることも無いので自分の寝室からじっと外の様子を眺めていた。

まあ、本を読みたくてもラノベとかあるとも思えないし、テレビやパソコンがあるわけでもなし。

文学書なんて持ってこられても読む気もしないし、大体字は読めるんだろうか？

とりあえず意思の疎通は完璧に出来ているみたいなんだけど。

自分でいろいろ調べてみたけど、僕は決して日本語を喋っているわけではないみたいだ。

意識して文章を構築してみたら分かったんだけど、どうも僕が知らないまったく新しい文法に則ってるみたい。

なのに何故喋れるのか。

結論！　僕に分かるわけがない。

もしかしたら文字もきっちりと読めたりするのかもしれないけど、今はまだ試す気にもならない。

お腹が空たなあと思ったころ、昼ごはん以来の来訪者がドアをノックしていた。

「はい、どうぞ」

「失礼します、姫様」

朝、ドクターと一緒に色々と身の回りの世話をしてくれたメイドさんが入ってきた。

名前はミーシャさんっていうらしい。

クールな表情にちょっとぶっきらぼうな口ぶりが凄く雰囲気ぴったりして、一言で言えば男らしい？　女性である。

「いらっしゃい、ミーシャさん。今度は何でしょうか？」

「はい、そろそろご夕食の時刻となりますが、お食事はどうなさいますか？　皆様とご一緒されるようでしたらお召し変えさせていただきますが」

「あ、そうですか。……この部屋でって訳にはいかないのでしょうか？」

苦笑いをしながら、ミーシャに尋ねてみる。

まあ駄目なら腹をくくって行かなきゃ仕方ないんだけど。

「分かりました。それではその様に手配させていただきます」

それだけを言うと、さっと踵を返して部屋から出てゆくミーシャ。

かっこいいなあ、漢らしいなあとその後姿を見送る。

そしてまた独りぼっちになった。

今日この部屋を訪れたのは、ドクター・グェロ、ミーシャ、フェイ兄様、レオの4人だ。

食事時になるとあと3人くらいメイドさんが増えるけど、おおむね壁の花。

喋ることもなければ、視線すら会わない。

みんな心持ち視線を下にして、じっと立っている。

食事が終われば一斉に動き出して、無駄口一つ叩かずに出て行ってしまう。

あれがメイドのプロ集団ってことなんだろうと、一人感心していた。

「今日一日ほとんど一人だし、さすがに暇だし寂しいなあ」

ベッドの上に寝転がって、ぼつりと本音が漏れてしまう。

立場が上の人は孤独だっていうけど、こういう状況を言うのかな？

だったら偉い人なんかにならなくていいんだけどなあ。

枕を抱きながらごろごろしていると、ミーシャが数台のワゴンと共に部屋に入ってきた。

後ろには男性が数人がかりで少し大きめのテーブルを下げている。

次に入ってきたのは、豪華な布張りの食卓椅子が4つ。

その次が、テーブルクロスと燭台、花瓶、それに生け花を携えた花師さん。

あれよあれよという間に殺風景な寝室にダイニングスペースが出来上がる。

そして最後は真っ白な制服に身を包んだ給仕さんが、ぴかぴかの食器を並べてゆく。

僕はその手際の良さに圧倒され、ぽかんと見守るだけだった。

「姫様、ご用意が出来ましてございます」

「あ、ありがとう」

いつの間にか私の傍に来ていたミーシャが、恭しく頭を垂れている。

こんな凄い人たちに頭を下げられる程、僕は凄い人間ではないのでどうしても気後れしてしまう。

外の人はどう感じていたのかなあ。

僕はミーシャが誘導してくれるとおりに席につき、近寄ってきたメイドさん達のされるがままになる。

二人寄ってきてボールの中にある水で手を拭かれ、別の二人が手際よくナプキンを首と膝にかけてくれる。

給仕がいい音をさせながら食前酒っぽいものをグラスに注ぎ、ミーシャがスープを入れてくれた。

「あ、あの有難うございます」

「……」

少し気後れしながらメイドさんや給仕さんたちにお礼を言うも、誰一人答えを返してくれなかった。

き、気まずい。

高貴な方とは直接お話も出来ないってやつか？

これは地味にきついぞ。

彼らの無反応振りにどうリアクションすべきか悩んでいると、ミーシャが耳元でそっと囁いてくれる。

「準備が整いました。どうぞお召しあがりくださいませ」

「あ、そうですね。それじゃあ、いただきます」

両手を揃えて“いただきます”をして、スープに手をつけた。

うん、パンプキンスープっぽい味が口にふわっと広がって、なんていうか幸せになる味だなあ。

あっという間に、皿の中のスープを全て平らげてしまう。

少しナプキンに垂れたりテーブルの上に雫が落ちたりしたけど、拭けば無問題。

ごしごしと首もとのナプキンでテーブルを拭いてから、お代わりを頼もうと顔を上げた。

と、壁の花のメイドさんと一瞬視線が合ってしまう。

あれ？　なんかびっくりしたような表情だよね？

よく見ると、なんか皆の視線がテーブルとかナプキンに突き刺さってるんだけど。

な、何か間違ったのかな？

ハッとなってミーシャに振り返る。

彼女なら何か適切なアドバイスをくれるのではと思ったが、彼女はまるで僕を視界に入れることを拒否するかのように首を背けていた。

くっ、ミーシャさんには頼れないか。

といって他に声を掛けられそうな人も居ないしどうしたものか。

そんなことを考えていると、空になったスープ皿を赤毛のメイドさんがそっと下げようとしていた。

何が駄目だったのかよく分からないけど、気にしても今は始まらない。

そう自分の中で開き直って、赤毛のメイドさんに声を掛けた。

「あの、お代わりいただけます？」

「……はあ？」

「いや、お代わり欲しいんですけど……。あ、もう無かったら別にいいです」

「い、いえ、すこし暖める時間をいただけましたらお出し出来ますが」

「ああ、いいですよ、暖めなくて。そのままですごく美味しかったものですから」

「あ、え？ で、でも？」

「アニス、姫様の御所望です。すぐに用意を」

「は、はい！」

ミーシャの鋭い声に、アニスはびくっとなって手にしていたスープ皿を床へ落としてしまう。微かに残っていたスープの残滓がその衝撃で僕の着ていた浴衣（っぽい寝巻き）に撥ねた。それを見たアニスの顔がみるみる青ざめてゆく。彼女の膝ががくがくと震えたかと思うと、ストンと床に崩れ落ちた。

「ももも、申し訳ございませんっ」

「ひいっ！」

凄い勢いで謝られている僕。

ちなみにひいってなったのは僕だったりする。

そりゃ普通びっくりするでしょう。

でもそれ以上に普通じゃないのは目の前のアニス。

ガタガタと震えて土下座してるその姿を見て、この状況が異常であるとイヤでも理解できた。固まる体に氷点下へと突入する場の空気。

そんな中頼れるメイド、ミーシャが動いた。

「スヴィータ、アニスを連れて外へ。メイはお召し換えをお持ちして。男性は皆いったん外へ出てください」

すげえよ姐さん。

この凍った空気の中、なんでそんなにテキパキと指示をだせるのか。

一糸乱れぬ動きで、あっという間にその場が收拾されていく。

色々と驚いたけど、ようやくほっと一息つける気がした。

「あのミーシャさん」

「はい、何でございましょう？」

「アニスに気にしないように伝えてもらえないでしょうか。別にこれくらい拭けばいいんだし、着替えるのも大げさだと思いますし」

「事を大げさにしてしまい申し訳ございませんでした。この責めはいかようにもお受けいたします」

「いえ、そんなに畏まらなくても。それにミーシャさんが良かれって思ってしてくれたことですし。お礼をいうことはあっても責めるなんて私には出来ません」

「はい、ご寛恕を頂き返すお言葉も見つかりません。アニスには今後このような失態をせぬよう

厳しく指導いたしておきます」

「あー、お手柔らかにしてあげてくださいね？」

「承知いたしました」

そうってミーシャは深々と頭を下げた。

正直こんなことくらいで怒ったりしないのに、ちょっと周囲の過敏な反応に違和感を覚える。

ってというか、外の人いったい今までどんな風に皆と接してきたのさ！

お め と